

特255
952
524-2

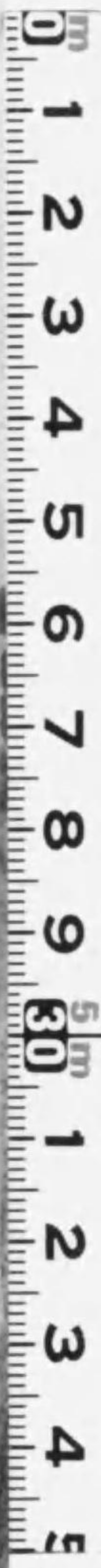
特255
952

安南焼に就て

原文次郎君述



日本では一口に安南と申して居りますが、之は日本と安南との交通が、戦國時代から徳川初期に亘つて相當にありまして、其陶器が、主として安南の港なるフエーフホー又はチュランから、徳川初期以來日本に渡つたが故に斯く申すのであつて、其實は多くは今の東京地方で作られたものゝやうであります。地理の上から見ましても、東京の方が支那の文化を受け、或は西藏乃至西域の影響を蒙ることが安南よりも早かつたものの如くであります。尤も、東京といひ安南と申し、唯今こそ行政區域を異にして居りますが、前には或は離れ或は合して居り、人種も先づ同一であり、境を接して居るのであるから、此地の陶器を總て安南と呼べばとて、さして異議を唱ふるにも及びますまい。であるから、以下安南と



始



私が申し上げますのは、東京、安南、時に占城チヤムパをも併せてのこと、御承知を願ひます。

二

支那と安南とは、嚴密なる人種學上の批判からしますれば、全然同一人種ではないといふ説もありますが、それ等は今彼はいふの必要はありませんまいから、兎に角、殆んど同文同種と見て敢て大なる過ちはないかの如く存じます。であるから、其窯業も、固より支那から傳はつたと見るべきであらう。私の持つて歸つた標本中の最も古いと唱へらるゝ壺、之は河内東洋學院附屬博物館の説明によれば、凡そ八九百年前東京が支那の屬國であつて象郡と申した頃のもので、其窯跡が今でも現存して居ると云ふて居るものを見ましても、慥かに轆轤で引たものでありますから、安南の窯業が支那の影響を受けて起つたといふことは先づ斷定してもよろしいと思ふ。隣國の暹羅には、宋胡録以外先づ窯業といふ程のものはなく、緬甸からとも思はれず、更に其隣りの印度から來たとは尙以

て考へられず、西藏の窯業なるものは、ローフワー氏の説によれば、支那から行つたといふことであるから、安南の窯業を支那傳來と見るのが最も妥當でありませう。唯併し、安南古代の窯製品が全く支那から移住した陶工の手に成つたか否かは一寸斷定致し難いのであります。

安南といふ國は、洵に文獻に乏しい國のやうであります。之は私の不學寡聞にもよりませうが、建國以來小國分立して殆んどのべつに喧嘩ばかりして居りましたから、信賴すべき歴史文獻が傳はらなかつたのでなからうかとも考へられます。明治十五年陸軍省の翻譯出版にかゝる安南史によりますれば、安南は帝堯の時から既に支那の統治を受けて居つた。秦の始皇帝の時に國號を越といつて半は獨立の形ちとなり、漢代に於て南越と稱し、一に文即圖と呼ばれて居つた。隋代には趙越といつて居り、爾來或は獨立し、或は支那の屬國となりして居つたのであるから、窯業上に支那の影響の深いのも當然であらうかと思ふ。

三

安南陶器の起原は處で安南の文化を考へて見まするに、是亦文獻更に貧弱であつて、一向様子が判らぬ。唯安南の李氏の第三世聖宗の時國中四大觀あり、其一を報天寺の塔とす、高さ三百尺、其二を瓊林の釋迦像、其三を普明の佛寺の銅巨釜、其四をキイヂーン村の巨鐘、其樓造の大工巧の妙人皆目を驚かすとありますから、工藝の發達は相應にあつたと思はれます。其聖宗の時といふのが西紀一〇五五—一〇七二年、支那では宋室南渡の五六十年であつて、既に定窯もあり青磁もあつた筈であります。安南ではまだ陶器は出來て居らなかつたらしい。といふのは、此頃安南から支那に使用するもの、歸途必ず支那の工藝品、銅器、陶器の如きものを買つて歸り、此等を賣つて餘得となしたといふことが安南史に載つて居るが故であります。處が、西紀一四二二—一四二五年、明の統治中に戰爭があつて、明の將安南の壘を攻めた時に、城兵彈藥盡きて陶器を投じて敵をして城に上る能はざるしむと安南史に書いてあるのを以

て考ふれば、此時には相當澤山に安南で陶器が出來て居なければならぬ。といふのは、彈藥がなくなるかも知れぬといふので貴重なる輸入陶器を左様に澤山に城の中に準備して置かれるものではないと思ふが故であります。して見ますれば、安南陶器の起原は、西紀十一世紀、宋室南渡前後から十四世紀の間にあると見て、甚だ杜撰ではあるが、先づ差支ないやうにも考へられるのであります。

私の標本中最も古いと言はれて居るもの、それは決して安南陶器中の最も古いものではありませんまいが、博物館の説明では八九百年前の製作にかゝるといふのですが、果して其通りとすれば、宋の徽宗の大觀年中、此頃ちいよく日本にも來る鉦鹿陶の時代でなくてはならぬが、私は今少し若いものと考へます。手法の上から申しても、焼成火度から見ても、鉦鹿陶のやうにあんなに進んだものではない。尤も支那人が來て焼いたものでなく、支那人に教へられて安南人が焼いたものとすれば、手法の

巧拙を一概にいふ譯には參りませぬが、併しどうも今少し時代が若そうであります。二つ同じ様な標本が私共の方にありまして、他に之に類するものが河内の市場に、大さは違ひますが、三つ四つありました、それは口径六七寸、高さ七八寸の水指形の蓋物で、蓋の真中に孔がある、向ふでは飯を入れるお鉢として使用するのであるさうであります。火度は先づ九百度か精々千度まで、黄味を帯びた半透明の灰分の勝つた釉薬がかゝつて居ります。處で、面白いのは其裝飾の手法である。胴と蓋とに極めて簡單で、而して随分大膽な唐草文様が、恰も今の蠟抜のやうに文様だけ素地を現はして居る、それだけなれば何等不思議はありませんが、其素地によつて現はれたる唐草文様の上に茶褐色の鐵釉が極めて古拙なやり方で塗つてある。稍々濃い褐色と幾分青味がかつた淡黄色との對照が一寸捨て難い味を見せて居ります。今の手法であれば、先づ鐵釉で唐草を描いて、それを蠟で押へて、全體に透明な上釉をかければ出来る

事でありませうが、少なくとも五六百年、六七百年前に安南でかゝるやり方をして居つたかと思ふと、安南人却々に馬鹿でなかつたと思はざるを得ない。

安南の青磁——私寡聞にして、日本の陶器の書物に安南に青磁があることを書いたものを見た事がありませぬ。大抵の瀬戸物を呂宋安南ト押片附ける癖のある田内梅軒翁の陶器考にも、安南に青磁があるとは書いて居りませぬ。唯同書中に、珠光の茶碗皆青磁にて高麗にあらず、珠光青磁エフコ珠光水指をみるに皆呂宋製なり、青井戸も印度の青磁なれども高麗と混じたりとあります。呂宋に青磁なんか出来て居らぬ事はベルトルド・ラウファー氏も申して居ります。印度には私も六年も居りましたが、決して青磁なんかは出来て居りませぬ。之は恐らく安南の青磁を見て左様に申したのであるまいか。と申すは、標本によつて皆様も御覽の如く、安南の青磁にはよく珠光青磁かと思はるゝものがあるからであり

ます。私も最初は、此等青磁は安南出来ではなく支那傳來品か、事によれば、西紀千三百年頃には朝鮮と安南と交通して居りますから、朝鮮製、高麗青磁が来て居るのではないかと思つたのでありますが、河内の博物館の説明によりますれば、今から六百年前後に支那の陶工が移住して参り、東京に窯を立て、本國から持つて来た釉薬を使つて焼た青磁であるとのこと、それから能々其土を見ますると如何にも安南の土に相違ないやうであります。而して其手法を見ますれば、盆底双魚もあれば、定窯から支那の青磁に傳はつたらしい奔放な指頭文もあり、雲形の如き劃華もあり、慥かに支那人が来て焼いたらしいと思はれるのでありますが、今一つ不思議なるは其中の釉色が砧手になつて居るものゝ如きは、一見高麗朝初期の製作としか考へられぬものがあります。

固より頼るべき文献によつての事ではないから、單に私の一家言としてお聞き流しを願ふのでありますが、どうも私は、浙江系の青磁が、一

方南下して朝鮮の全羅南道に来て高麗青磁となり、一方西に切れて東京に入つて安南青磁となつたのでないか、更に進んで暹羅の宋胡録青磁となつたものではないかとも思はれてならぬ、さう考へて見たくてならぬのであります。

安南青磁の特徴としては、

(一) 其釉が甚だしく結晶性を帯びて居る事—之は釉薬の中に灰分を多く含むがために結晶作用を促進したといふ理由も、或はあるかと思ひますが、寧ろ窯の冷し方にもよる、則ち早く冷却させるから蕎麥の様な結晶が出て参る、斯ういふ現象を多く見るところから考へますと、安南に特有なる一つの窯の冷し方の癖があるのではなからうかと思ひます。

(二) 青磁の釉色の甚だしく不揃である事。多くは色の上りが悪いこと—實物を御覽になればお解りと思ひますが、安南の青磁には種々な

一〇
るものがあります。先程申した通り砧手もあれば、殆んど高麗青磁としか考へられぬものもあり、珠光青磁の様に思はるゝものもあり、もつと色の黒ずんだものもあり、伊羅保の様なものもある。そんな黒いものは固より青磁とは申されませんが、鐵釉であることは慥かた、其含有量と焰とによれば、當然青磁になるべき筈のものであります。之は窯の構造からして、還元焰の充分廻つたところと廻らぬところがあるが爲めと、今一つは釉薬中に鐵分含有量が區々であるが爲めではないかと思はれます、つまり青磁としては下手なものであるかと考へる。

(三) 赤褐色胎土以外のものに鐵足のなきこと―青磁薬を被つて居る安南陶器の中で、胎土の著しく赤いものがあります。之は勿論鐵足、言葉は少し變ですが、寧ろ鐵座といひたい位のものであります。其外の大部分の青磁は、焼成火度高く、胎は殆んど磁化して居るに

拘らず鐵足になつて居らぬ。之は胎土に鐵分を含まぬためと、後世の支那、清の乾隆以後の青磁の様に故らに塗り土をして鐵足を作るといふやうな事がなかつた爲めかと存じます。

安南の染附―昨年名古屋の入札に、徑八寸位の平皿が一枚ありました。殆んど半磁器位の硬度で、吳須で大越國といふ文字が見込に書いてあつたのです。安南が國號を大越國と稱したのは、黎氏が始めて王位に即いた時で、西紀一四二八年、明の宣德三年、我が正長元年、足利の末期で、今から約五百年位前であります。でありますから、其大越國と書いた皿の出来たのは五百年後のことであるが、染附の始めて安南に出来たのは、果して何時頃からであらうか、一寸見當がつきにくいのであります。併し私の持つて歸つた標本中に、陶器胎で、少しく青味の中に紫を帯びた吳須で牡丹の花と葉の様なものを描いた肩衝形の花瓶がありまして、其様式手法から推して、支那ならば明の中頃ではあるまいかと思は

れるもの、之には河内の博物館の説明に、東京南部バッチャン産で、時代は約五百年前と書いてありますところから推して、安南染附中支那の手法に仿つて拵へた初期のものではなからうかと思ひますから、先づ安南染附の初まりは明の正徳嘉靖頃或は今少し降つて萬曆頃に安南に傳はつては居らぬかと想像するのであります。最初は陶器質であつたのが、次に半磁器質となり、更に時代が若くなつて磁器質となり、日本で所謂絞手と稱するものなどの出來たのは、今から二百年前位のものではないかと思はれます。

一體、安南陶器を通じて、其釉薬は餘程灰分の勝つたもの、融け易く、流れ易く、酸性に富むで失透すべき性質を有つて居る。其染附が、朝鮮李朝のものと頗るよく似て、霞陰れの花を見るが如き氣持のするのは、其釉薬の性質の然らしむるものと思はれます。絞手手の如きも、必ずしも最初から斯るものを作るつもりであつたのではなく、普通の鮮明なる

染附となるべきものであつたのが、上釉の流れるに伴れて、吳須の文様も流れて、不用意の間にかゝるものが出來たのであると見るのが妥當であります。火度が不足のときは失透し、火度が少し強ければ流れて絞手となり、最も適度に融けたのが普通の染附となつたものと考へられます。染附以前の陶器に殆んどお深井釉かと思はれるものゝあるのも、灰分の多い結果であります。

安南の蜻蛉手といふものを日本で仿造したものは、其模様正に蜻蛉になつて居ります。私は安南の本當の蜻蛉手なるものを見たことがないから、何とも云へませぬが、或はこゝにある標本の様な、強て蜻蛉と見れば見られるが、其實簡單な何の意味もない文様をば、日本で眞似をして、段々蜻蛉にしてしまつたのではありますまいか。之は皆様に教へを乞はねばなりません。

私の持つて歸りました安南陶器は、殆んど全部河内で蒐めたものであ

りまして、陳列所々藏のものと私のとを合せますれば、數に於て二十四五點ありませう。四五年前までは、安南でも古陶器が非常に少なく、随つて驚くべく高價であつたといふことではありますが、近年運河の開鑿の爲めに相當多くの出土品が市場に現はれ、其結果私共の手にも入り得ることゝなつたのであつて、河内の東洋學院附屬の博物館、之には随分立派な標本と多數の破片が集まつて居りますが、同館で蒐集し始めた頃には、非常に金がかゝつて、餘程蒐めるのに骨が折れたといふことであります。私の集めましたものゝ年代並に產地等は、一々其博物館に在る標本に照らし合せて記入して來たのでありますから、大體に於て甚だしく間違はないかと思ひますが、それにしても、私には少々腑に落ち兼ねる點もないではない。私の安南の歴史文獻に暗いのは先づ致方ないとして、恐らく東洋學院に致しても、安南の工藝に關しての正確なる文獻が乏しいのではないかと思はれる。蒐集品の説明などは、主として、つひ兩三

年前になくなられた人で、曾て日本にも來た事のある「ノアル、ペリー」氏によつてなされたものとの事であつて、同氏の日本支那の工藝品に對する鑑識眼必ずしも正確でないところから考へると、安南品も或はどうかとも思はれます。

日本で從來安南と呼び來つたものは、文様のなきものでは無地安南、或は砂糖量り、染附ものでは陶器質の吳須ねらひもの、磁器質になつては、染附、絞手、蜻蛉手等の限られたる種類に過ぎぬやうですが、私が見たる、且蒐集し得たる標本によつて分類して見ますれば、大凡次の様になるかと思はれます。

先づ胎土によつて分けて見ますれば、

(一) 白色に近い灰白色で、質緻密、恰も宋の磁州窯に見るが如く、鐵の含有量殆んどないかと思はるゝもの。

(二) 前者よりも幾分灰色を帯び、質粗にして砂交りて、同じく鐵の含

有量少なきもの。

(三) 質幾分粗く、暗灰色炆器質のもの。

(四) 赤褐色で、鐵の含有分多く、質幾分粗く、炆器質のもの。次に釉薬につきて分類すれば、

(一) 灰分多く、熔け易く、流れ易く、透明なるもの。

(二) 同様にして半透明なるもの、之には磁土が配合されて居るが故に然るのではないかと思ふ。

(三) 前者に比して灰分更に多く、お深井釉に酷似せるもの。

(四) 鐵青磁釉で、結晶性に富めるもの。

其次に文様寧ろ裝飾デコレーションから分けますれば、

(一) 蠟はじきの如くにして素地を残し、其上に鐵釉を施したるもの。

(二) 上釉の下に鐵砂を以て簡單なる文様を施せるもの、或はエンゴ―
べがあるのかも知れぬ。

(三) 浮模様、之には二通りありまして、一は龍泉式に雲形、花鳥魚の

如きものを浮模様として、其上に釉薬をかけたものと、今一つは、

雲龍の如きを高彫りとなし、之を素地の儘に残し、其他の部分を染
附とせるもの。

(四) 刻模様―定窯に見るやうな奔放なる篋割りをなしたるものと、猫
搔き手の如き細線を彫つたものとあります。

(五) 鮮明に文様の現はれて居るもの、之は吳須の色の幾分紫を含んだ
やうなものと、青味を帯びたのと、著しく淡く李朝の染附に近いもの
とあり、其外に絞り手の如く吳須がボヤケて文様の不鮮明になつた
ものとあります。

安南陶について、田内梅軒は、丸き薬はげあるは、足を置かす重ね焼
故薬を掛のこすなり、と云つて居るのは、標本で御覽の通りで間違はな
いが、茶碗には之がないと申して居りますけれど、現に茶碗にも此通り

丸い薬はげがあります。

五徳跡なしといふて居りますけれども、寫眞で御覽の通り五徳あとの見るものも可なりあります。

終りに、陳元賛が尾張に來て焼いたものが安南狙ひだといふことを一般に申しますが、而してお深井焼の起原をなしたものであるともいはれて居りますが、成程釉薬から見れば、頗る安南に似ては居ります、而して、其染附、之も其色合といひ、ぼやけて居る工合といひ、安南に似て居りますけれども、私は果して安南を仿造せんとして斯るものを元賛が作つたのであるか、或は偶然の結果に成つたものをば、其出來榮によつて後から斯ういふ風に人がこじつけたも、か、少しく疑はしいのであります。窯業藝術の進まぬ時代に、吳須を使つて、無造作に焼けば、大抵あゝいふ風な品が出来る。故らに安南を眞似なくとも、自然安南風なものが出来る。古から尾州に在る灰分の多い粘土を上釉に使用したまで、

文人の餘技として、趣味本位の仕事であつて、元賛の個性の現はれこそあれ、故らに眞似を試みたのではないのではあるまいか。といふのは、安南の染附が段々質が悪くなり、一質の悪くなつたといふのは趣味から見たのではなく、窯業技術から云ふのであります。絞り手のやうなものを多く出すことになつたのは、今から二三百年前徳川氏初期の末頃からやうに思はれるのに、元賛の來朝は、明の天啓元年、西紀一六二一年、秀忠將軍の元和七年であるから、日本に其頃絞り手の安南は餘り多く來て居らなかつたかにも思はるゝのと、眞似るなら必ず其形や文様を眞似るべきであるのに、それではなくして、自分がやらうと思つても思ひ通りに行かぬ釉薬の流れ具合や、吳須のぼやけて居るところが似て居るからして、果して元賛が安南を仿造したと云ひ得るかどうか。尤も、前に申した大越國の文字ある皿を、元賛が仿造したことがあるといふ人もありますから、一概にも固より申されませぬが、よしそれにしても、元賛

の作つた陶器のやうなものは、必ずしも安南を眞似なくとも、容易に作り得たものであると申して差支ないやうであります。

實物の標本を御目にかければそれで済んだのに、終始想像から割り出した話のために、長時間お妨げしたことをお詫致すと同時に、安南陶器は相當研究の價值あるのでありながら、之が研究が未だ怠られて居るかの如きは如何にも遺憾であるから、此方面に於て是非皆様のお力ぞへを願ひたいと思ひます。(大正十五年九月二十日)

南京報恩寺の陶塔

中尾 萬三 君述

私は此間南京へ行つて報恩寺を訪ねた、それは報恩寺には陶器の塔があつたと云ふことであるから訪ねたのである、報恩寺に大きな陶塔があつたと云ふことは豫ねて聞いて居つたが、それが現在は湮滅しかけて居る、今調べて置かないと將來どんなに變遷するかも分らないと云ふので行つて視たのである。

報恩寺の塔に關しては、先づ報恩寺の所在であるが、報恩寺は南京の南門外にあつて、初めに建初寺と云つた寺の後である、建初寺は吳の赤羽十年と云はれて居るが、康僧會と云ふ坊さんがあつて其人が創めて開いた寺である、其當時に初めて江南地方に於ける佛教が開かれた、此建初寺は色々に名が變つて、後に長干寺と云ふ名も附いて居り、其後に建

つたのが報恩寺である、何故に報恩寺と云ふ名を附けたかと云ふと、明の永樂大帝と稱せられた成祖が永樂十一年に、北の方の民族に相當注意を拂はなければならぬと豫ねて思ふて居つた爲め、都を北京に遷さうと云ふ考へで、自ら北京に行かうと思つた時に、先帝、先皇后の追福の爲に塔を建てられた、其塔が即ち報恩寺の塔であつて、其處から報恩寺と云ふ寺號が始まつて居るのである。

それで報恩寺の記文と云ふものは、私の知つて居る範圍に於ては極めて僅かである、先づ其中に於て位置を見ると、南京の南門外にあると云ふことであるから、私は先づ南門外に行つて見た、所が現在報恩寺のある所は南門の近くであるが昔報恩塔のあつた所ではない、現在では長干寺と云ふ名に依つて昔の報恩寺と云ふことが知れるやうな小さい寺である、其處で案内を乞ふて塔の所在地に行つたのであるが、塔のある所は南京の郊外の高臺の下にあつて分り易い所である、南門外の通りから少

し入つて報恩寺へ行く道路は全部瓦で敷詰められてある、恐らく此瓦が報恩塔の瓦であらうと思ふたのであるが、記録に依ると報恩塔は三十二丈九尺四寸、約三十三丈、即ち三百三十尺の高い塔で、それが全部陶器で出来て居る、陶庵夢憶と云ふ本は、明朝を賞めて書いてある爲に清朝の時分には讀ませなかつた本であると聞いて居るが、それに依ると、報恩寺の塔は明朝の國の寶である、さうして開國の精神を表はしたものである、大きな勇氣、膽力、智力を有つた者でなければ斯う云ふ塔を立てることは出来ぬと賞めて居る、又中國の者が南京の塔を見る時には皆嗟嘆すると云ふ位に書いて居るので、當時は餘程立派なものであつたらうと思ふ。

其塔の形は今から想像することは出来ないが、色々の文獻を便りに調べて見ると、九層であつてさうして八角の塔で頂端には金色の九輪があつたらしい、夫れには八條の鐵索が下つて居る、一つの鐵索には各九個

の風鈴が附けてある、軒にも風鈴が附けてあつて全部で百五十二個あつて實に美しい塔であつたのみならず、此塔には欄干があつてずつと上に登れる、殊に其塔の美觀としては毎層一面に燈明が二つ付くやうになつてそれを毎夜點ずる、さうして一番下の八方殿には瑠璃燈を十二下げてあつて全燈數百二十八ある、此瑠璃燈は今の硝子燈であるから當時は珍らしい、さうして大變美しいものであつたに相違ないと考へられる。

そこで其塔はどう云ふ工合にして造つたか、其塔を焼いた窯はどう云ふものであるか、どう云ふ釉薬を用ゐたか、それ等の事を視たいので訪ねたのであるが、非常に大きなブロックを使つてある、幅五六寸、長さ二尺、厚さ一尺五寸位のブロックを積み重ねた塔で、釉薬は黄南京と云ふやうな黄色の鉛釉、茲に緑色の釉で、其釉薬が厚くしつかりかゝつて居る、さうして素地もよく焼締められて居つて、煉瓦の素地を見たが、色が唐三彩の素地の様なもので非常によく締つて居る、其大きなブロッ

クを焼いた人の技術はえらいものだと思ふが、他の記録を讀んで見ると其塔の細工は鬼巧であると書いてある、それに全部佛様が彫刻してあつたさうであるが、其佛様の意匠圖案は、顔や容が、煉瓦一枚を見たのでは何だか分らないが接ぎ合はして見ると立派な佛像になつて有難く思はれると云ふやうに書いてある、さうして尙ほ書いてあることに佛の體は全身であつて十五六の煉瓦で出来て居ると書いてある、九層で三百餘尺と云ふやうなことから推測すると、恐らく丈六とか一丈とか云ふ佛像が出来て居つたと思ふ、又全身であつたとすれば、素焼に漆を塗つて箔を置いたものであらうと思ふ、乾隆時代の佛像に、七寶で造つて鍍金をした様に見えて、よく見ると素焼の上に漆を塗つて箔を置いたものがある、恐らく報恩寺の陶塔の佛像も左様にして箔を置いた立派なものであらうと思ふ、其報恩寺の跡に、其塔の露盤であると云つて居るが、大きな露盤が今遺つて居る（寫眞供覽）、其露盤は重さ四千五百斤と云つて居るが、

長さが三米突以上あつて高さは一米突半位の立派なものである、それが塔の上に載つて居つたのであるから餘程大きな塔であつたところは想像し得られる、今ではそれが残つて居るだけである、唯露盤を置いてある下に大きなブロックが埋めてある、掘起して見れば分るのであるが餘り惜しい氣がしたので其儘にして置いた、放生池の跡で放生池の瓦と云ふものを見た、それは色々あるが、蓮の花と葉が抱き合せてあるものがあつたが、其瓦の色は、紫に上げやうと思つて上らないで墨色になつたものと思ふが、さう云ふ瓦が遣つて居る、それが澤山に發見される、ブロックのかたまりがあるだけで何も残つて居ない。

そこで其瓦は何處で焼いたかと云ふことであるが、白下はつかさげん瑣言と云ふ本には南門外西善橋となつて居る、そこで南門外へ行つて西善橋と云ふのは何處だと云つて聞いた所が、南門外から三十清里あると云ふことであつた、遠いので閉口したが兎も角西善橋へ行くことにした、其處へ行く

路には全部瓦が敷いてある、恐らく其處には大きな窯があつたことは想像される、三十清里を走つて西善橋へ行つて見ると西善橋鎮と云ふ額が掲げてある、其西善橋鎮で古い窯があるかと聞いて見ると、西善橋はお前の尋ねる瑠璃窯の跡ではない、報恩寺を建てる時に使つた瓦を焼いた跡だと云ふことで、山の腹に石灰窯のやうな、大鼓のやうな窯がある、今所々に残つて居るのは直徑三米突四米突あるやうな大きな窯である、所でそれは瓦を焼いたので我々が知りたい瑠璃窯ではない、其瑠璃窯は南門外の芙蓉寺であると教へて呉れた、そこで南門外に引返して芙蓉寺へ行つた、其附近には澤山のブロックがあつて、畑に積上げてあるものは皆瓦の破片である、それで芙蓉寺まで行かうと思つたが、日が暮れてまるで見えなくなつた爲に、また來る機會もあらうと思つて芙蓉寺は訪はなかつた、其處にはさう云ふ窯があつたのであらうと思ふ、私は其時に考へたが、將來其跡へ行つて色々のブロックを捜し出して其寸法を計

り或は其釉薬を見たならば、どう云ふ工合にして焼かれたかと云ふことも分り、又どう云ふやうにして組立てたかと云ふことも分りはしないかと考へた。

茲に面白い事は、西善橋の古窯は山の腹にあつて、現在瓦を焼いて居る窯は平地にある、是は何故に山腹の窯を廢めて平地に移つたかと云ふ問題であるが、是は恐らく天候の關係であらうと思ふ、あの邊は夏は雨が多いので、雨水の爲に窯の火が消えると云ふやうなことから平地に移つたのではないか、一切經音義に支那の窯と西域の窯の區別が書いてあるが、其の註文に西域の窯は平地にある、何故に平地にあるかと云ふと土地が濕質である、それが爲に平地にあつて山にないと書いてある、西善橋の窯もさう云ふ關係で山腹にあつたものを平地に移したのではないかと思はれた、もう一つ非常に興味を覺えたのは明の皇宮の跡に在つた幅六七寸の煉瓦を見たが、其瓦は全く磁器であつてさうして染附で、蜘蛛

と蝙蝠が描いてあつたが實に立派なものであつた、それで報恩寺の形式は大内式に則つて造らしたと云ふことが書いてあるから宮殿と同じ染附の瓦を使った贅澤なものであつたらうと思はれる、高麗朝の毅宗皇帝が青磁瓦を使ったと云ふことがあるが、それと好一對で甚だ面白いことであらうと思ふ。

私のお話はそれだけであつて、報恩寺の跡には今何も残つて居ないと云ふこと、併し報恩寺の瓦は非常に立派なものであつて釉薬も立派である、瑠璃窯の跡は芙蓉寺にあることが分つたから、將來もう一度行けば尙ほ色々な事が分るだらうと思つて居る。甚だ簡單であるが此機會に御紹介した次第である。(大正十五年九月二十日)

彩壺會發行圖書目錄

高麗窯茶器	茶入の話	日本陶磁器の分類法	三浦乾也	弄山萬古	田中長次郎	古九谷論	九谷窯の系統に就て	柿右衛門と色鍋島
今泉雄作君述	今泉雄作君述	大正生述	大正生述	大正生述	大正生述	大正生述	倉知誠夫君述	大正生著 增補第參版
定價金五拾錢 郵税金貳錢	定價金五拾錢 郵税金貳錢	定價金五拾錢 郵税金貳錢	定價金五拾錢 郵税金貳錢	定價金五拾錢 郵税金貳錢	定價金五拾錢 郵税金貳錢	定價金五拾錢 郵税金四錢	定價金五拾錢 郵税金貳錢	定價金參圓五拾錢 內國小包料拾貳錢

鍋島	大正生述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
肥前磁器の創業期	鹽田力藏君述	定價金七拾錢 郵税金四錢
奥田穎川	大正生述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
樂常慶とノンカウ	大正生述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
野々村仁清	大正生述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
中興時代の瀬戸窯	鹽田力藏君述	定價金七拾錢 郵税金四錢
青木木米	大正生述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
仁阿彌道八	大正生述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
尾形乾山	大正生述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
支那青瓷及其外國關係に就て	横河民輔君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢

雲鶴青磁	奥田誠一君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
光悦と空中	大正生述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
朝鮮三島の話	奥田誠一君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
支那陶磁雑話	征川 潔君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
支那青花瓷器に就て	横河民輔君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
陶磁器の鑑賞に就て	奥田誠一君述	定價金七拾錢 郵税金四錢
三河内焼(平戸焼)に就て	奥田誠一君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
永樂保全	大正生述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
唐津焼の話	奥田誠一君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
高麗青磁の窯趾と其製作品	中尼方三君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢

24
2

昭和二年六月十三日印刷
昭和二年六月十八日發行

不許
複製

發行所
發賣所

東京市日本橋區室町三丁目十番地
東京市麴町區有樂町一丁目一番地
(丸の内東通五號)振替東京二四一七番地

彩壺會
靱山書店

定價金五拾錢

編輯者兼
高瀨 誠 三 郎
東京市日本橋區室町三丁目十番地

印刷者
島 連 太 郎
東京市神田區學士代町三丁目一番地

印刷所
三 秀 會
東京市神田區美土代町三丁目一番地

辰砂手に就て	小森 忍君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
染付と赤繪	奥田 誠 一 君述	定價金參圓五拾錢 内國小包料拾貳錢
安東燒及其系統	奥田 誠 一 君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
六兵衛と其系統の陶器	奥田 誠 一 君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
八代燒に就て	奥田 誠 一 君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢
安南燒に就て	中原 文次郎君述 尼 萬 三 君述	定價金五拾錢 郵税金貳錢

終

